

KDDI「Smart TV Stick」

専用リモコンが切りひらく
スマートテレビの新たな形

KDDIが昨年末からケーブルテレビ契約世帯向けに提供を開始した「Smart TV Box」は、その革新的なサービス内容から大きなインパクトを残した。一方、リモコン上に設けられたボタン数の多さを見て、「高齢者でなくとも使いこなすのは難しいのでは」といった疑問の声が上がったのも事実。そうした状況の中、2月に投入された「Smart TV Stick」は、UIの観点から見て驚くほど発展的な進化を遂げた。

「Smart TV Stick」は、テレビに接続することでネット上の動画や音楽などを楽しめるようになる小型のセットトップボックス（STB）。端末は売り切り（auオンラインショップ価格9,800円）で、別途月額使用料など課されない。

利用できるサービスはauの公式サービスであるビデオパスやauスマートパス、うたパス、LISMO WAVEなどに加えYouTube、ニコニコ動画といったオープンな映像・音楽系サービスもカバー。またGoogle Playで提供される500以上のアプリ・ゲームもテレビ画面で楽しめる。

トップ画面は最下部のライン（auスマートパス、Google Playなど）を除き自由にカスタマイズ可能。スタート段階では動画利用を促進するウィジェットや天気予報、利用頻度が高いとみられる各種サービス・アプリのアイコンが並んでいるが、ユーザの状況に応じて自由に差し替えることができる。

また、画面をタップして横にずらすことで、別のアイコンが表示された画面に移行することが可能。こうした挙動はスマホ・タブレットにおけるそれとほぼ同様で、正しく「スマホのようなテレビ」となっている。

操作端末は専用リモコンおよび対応のスマートフォン。ここで注目すべきが、某ゲームハードのコントローラーを思わせる外観の専用リモコンだ【写真1】。ボタン点数が必要最低限に絞り込まれ、某ゲームハードよりしくリモコンを振ってのポインタ操作も可能。「Smart TV Box」で見られた「リモコンの壁」を鮮やかに取っ払った。

そもそも「Box」においても基本操作は上下左右と決定、戻るキーあたりで完結しており、大量に配置されたボタンを使いこなさずとも十分に利用できるよう工夫はなされていた。それでも今回、

【写真1】
リモコン（右）とSTB本体



ボタン点数を絞った上にポインタ操作機能を付加したことで格段にUIが向上した印象を受ける。

もうひとつ、STBとリモコンを繋ぐのがBluetoothであることも評価ポイントだ。「WiFiでは反応速度が少々鈍く、赤外線ではSTBの設置場所を選ぶ必要がある」（サービス企画本部マルチアクセス&サービス企画部ホームネットサービスグループ課長・池田大樹氏）との理由からだが、こうした指摘からも使いやすさへのこだわりが見てとれる。

意義のある 「専用リモコン」用意

「テレビリモコンというより、タッチ操作を基本としたスマホ・タブレットの挙動をいかにテレビ操作へ持ち込むか、がテーマでした」（サービス企画本部マルチアクセス&サービス企画部ホームネットサービスグループリーダー 担当部長・庵原武彦氏）。

スマホでのリモコン操作は画面上のポインタ操作をテレビ画面側にも反映させられる上、文字の

手入力や音声入力といった多彩なUIを駆使して華麗に操作することが可能だ。一方、家族全員がスマホを利用しているとは限らないし、そもそも使いこなすためのハードルも決して低くはない。

通信キャリアとしてスマホ普及を掲げる中、高性能なスマホリモコンを追求する傍らで「誰にでも使える」専用リモコンを用意したことは、今回の取り組みにおいて最も評価されるべき点のひとつだろう。実際、このリモコンの存在によって利用対象年齢層は確実に広がるはずだ。

ちなみにリモコンでのポインタ操作は少々癖があり、使いこなすには多少の慣れと調整（反応速度を落とすなど）が必要。もっとも、上下左右キーの反応・動きは早く画面スライド操作も可能なため、某ゲーム機でポインタ操作に慣れているユーザ以外はおとなしくこちらで操作したほうがいいかもしれない。

なお、本体がHDMI端子への直接接続ではなくケーブルを介しているのは「各家庭の利用環境を考慮して」（池田氏）だそう。直接接続でテレビの他の差し込み口を侵害したり、APとの位置関係が固定されて通信環境が阻害されたりしないように、とのこと。UIとは少し違うが、細かなユーザへの配慮が散見する「スマートな製品」に仕上がっている。